

1997年6月例会要旨

シネマ探索世界への旅
— 現代の映画と学生の関心 —

国際文化コース 永治日出雄

この例会については当初「現代の映画と学生の関心」という題目を設定し、皆様へのご案内にもそのように記されています。数年来私は担当する講義や演習の教材として多くの映画を組み入れ、こうした風変わりな教育方法に関心を寄せたり、疑問を示される方々もおられます。しかし、私の試行的な授業に関して具体的な有様をやや詳しく叙述したこともあり、(1) 本日は標題のようにテーマを限定し、多少異なった角度から自分の模索や体験をお話したいと思えます。

I

もともと私は主としてフランス近代思想を学んできた者で、映像・映画について専門的な教育や訓練を受けたことは、まったくありません。ただし、映画の黄金時代と言われる1950年代に少年期・青年期を過ぎた世代として、映画館へ通うことは文学書を読むのと同じく、主要な楽しみのひとつであり、人生と世界に眼を開く大切な窓でもありました。

私がやや意識的・継続的に映画を観るようになったのは、1979年から1年間文部省在外研究員としてパリで暮らしたときからであります。ソルボンヌを中心とするカルティエ・ラタンは、2キロ平方ほどの狭い地区ですが、90以上の映画館が存在します。ちょうどその時期はヴェトナム戦争後アメリカで口火を切ったニューシネマが、他の欧米諸国においても興隆し、ながく停滞していた映画制作が新たな隆盛を迎えたときでした。アメリカ市民生活の哀歎を伝える『クレイマー・クレイマー』や『マンハッタン』、ドイツの現代史を独自の観点から浮彫にした『ブリキの太鼓』と『マリア・ブラウンの結婚』、イタリア農村の民衆を描いた『木靴の樹』と『エポリ』、そして壮大な規模や劇的な構成で魅了するフランス映画『モリエール』、『ドン・ジョヴァンニ』、『華麗なる女銀行家』、等々。ソルボンヌ周辺のサン・ミッシェルや国際大学都市に比較的近いモンパルナスで、私はこれらの新作にいち早く接し、フランコ独裁への抵抗を刻印したスペイン映画や東欧民族の苦難を綴るハンガリー映画をさらに場末の映画館で観たこともあります。

こうした作品の相当数を各々40分程度に抜粋して、現在でも私は授業に組み入れています。たとえば、『クレイマー・クレイマー』は家庭の崩壊と子どもの養育について考えるために、『モリエール』はフランス絶対王政における民衆の悲惨を理解させるために、例年の教材となりました。ドイツの戦後史を背景とし、重厚で深刻な内容の『マリア・ブラウンの結婚』はかなり躊躇しましたが、一昨年より4年生の専門科目『ヨーロッパ現代思想』のなかで紹介し、学生から予想以上の反応を得ました。しかし、ジョゼフ・ロージ

監督による『ドン・ジョヴァンニ』のように、日本では特別な企画として公開されただけで、いまだテレビ放映もビデオ化もなされない作品もあります。

II

1989年フランス革命200年を記念する国際研究集会に出席した私は、はからずもオルセー美術館「映画の誕生」展示室でリュミエール社制作のシネマトグラフ上映に接し、初期映画史の研究に手を染めることとなりました。この年に日本でも衛星放送が本格的に開始され、

3000円台の市販ビデオの増加とあいまって、家庭や学校で映画を視聴する条件に著しい変化が生まれました。おりしも私は教員養成課程から新設の総合科学・国際文化コースに移籍し、これまでとは異なる学生の気質や関心にしばしば困惑する状態にあったのです。翌年の春担当する「ヨーロッパ比較文化論」第1回に初めての映画教材としてデヴィッド・リーン監督『旅情』を抜粋・上映し、以後多くの講義や演習でこうした試行を続けています。

その後学術的な催しや研究資料の収集のため東京や海外へ出張するたびに、努めて当地の映画館やフィルム・フェスティバルに足を運ぶようになりました。たとえば、植民地解放運動を描いた力作『インドシナ』は、1991年封切り直後にシャンゼリゼ大通りの壮麗なジョージ五世館で接しました。ロンドンに滞在したときは1992年には、人種差別を批判する『パワー・オブ・ワン』をイギリス最古の映画館エンパイア劇場で、またアイルランド移民を主人公とする『遙かなる大地へ』を外国人労働者の多いイーストエンドの一角で、さまざまな肌色の観衆の熱気に包まれて凝視しました。その翌年に陳凱歌監督の『さらばわが愛 霸王別姫』にいち早く触れたのは、カンヌ映画祭グランプリ受賞に沸く上海の大光明電影院においてです。

これらのフィルムはのちに日本でも公開されたり、ビデオ化されており、作品自体を知るためにわざわざ外国に出かける必要は勿論ありません。しかし、旅先出会ったフィルムの各々には、その時点における己れの自分状態や周囲の情景も付着して、特別の印象や愛着を感じるのです。また、『インドシナ』や『パワー・オブ・ワン』のように日本であまり評価されない作品についても、自信をもって語ったり、人々に推奨できます。なかでも『インドシナ』は毎年3年生の講義『ヨーロッパ思想特論』のなかに組み入れ、受講生がもっとも共感する教材のひとつとなっています。

しかし、言うまでもなく海外で映画探索を行う固有の目的は、日本で視聴する便宜のない作品を把握することにあります。たとえばパリ＝ムフタル街のエペ・ド・ボア館で企画されたエジプト映画フェスティバルやロンドン＝ピカデリー広場周辺の地下室で催されたラテン・アメリカ映画フェスティバルは、意外にもチュニジアとシンガポールで楽しめたインドのミュージカル映画数本とともに、欧米の映画に偏重した自分の視野を著しく広げてくれました。これらはフェスティバルといっても、単一の映画館である種の作品を集めた興行にすぎず、滞在の期間に偶々重なったものであります。しかし、ムフタル街の場合にはモノクロ時代の古典的なエジプト映画が2ヵ月にわたって約20本上映されました。このような企画を日本の学生たちと一緒に享受ができないのを残念に思い、エジプトやインドや中南米のユニークで魅力的な映画が日本に多数輸入される日を私は待ち望んでいます。

第95回例会

「キャンパスにおける セクシュアル・ハラスメント」

————— 現状から考える —————
— 大学におけるいくつかの取り組み —

話題提供者：見崎 恵子 氏（ヨーロッパ文化選修）
山根 真理 氏（家政学教室）

日時：11月19日（水）午後5時から

場所：ヨーロッパ文化演習室（第二総合科学棟1F）

どなたでも来聴歓迎

「アカ・ハラ（アカデミック・ハラスメント）」という言葉をご存じでしょうか。セクシュアル・ハラスメントは、私たち大学人にとっても身近な問題になってきています。セクシュアル・ハラスメントの正しい理解が必要だと思います。講演の後に、ケーキを囲んだ懇談会も予定しております。どなたでも、是非ご参加ください。

主催：日本科学者会議愛知教育大学分会
あたりまえの会